ボリビア、革新政権の打倒、周到に用意された巧妙なクーデター

PART I

PART Ⅰ　今回

1. クーデター計画の歴史的背景
2. 大統領選挙の実施
3. クーデター計画の存在
4. 警察・軍の蹶起とモラーレス政権中枢部の破壊
5. アネェス暫定政権の成立

PART Ⅱ　次回

6. アネェス政権の極右的政策の遂行
7. 5 月の新選挙の見通し

1.　クーデター計画の歴史的背景

▶189 番目のクーデター、これまでにない形

昨年 11 月 10 日のエボ・モラーレス大統領、アルバロ・ガルシア・リネーラ副大統領の辞任は、米国の筋書きに基づく、警察＝寡頭制勢力＝軍による、新しい型のクーデターでした。ボリビアでは、1825 年以降 189 番目の軍事クーデターでした。このクーデターは、軍部が決起し、戦車、戦闘機を動員し、主要官庁・通信・メディアを掌握し、時の大統領を捕捉し、国外に追放するという伝統的な典型的なクーデターではありませんでした。また近年ラテンアメリカで見られたような、大統領の邸宅を襲い、拉致し、国外に追放したクーデター（2009 年ホンジュラス）や、議会の多数により数時間の間に新大統領を選出し、現大統領を失脚させる議会クーデター（2012 年パラグアイ）や、議会の多数によりでっちあげの弾劾裁判で大統領を罷免する（2016 年ブラジル）クーデターとも違うものでした。政府幹部の家族の家を焼き討ちしたり、略奪したり、安全を脅迫したり、与党の事務所を焼き討ちしたりして脅威を与え、社会的騒擾を起こし、政府幹部に個別に辞任を迫るものでした。日本のマスコミはすべて、この政変をクーデターであると報道してはいません。ラテンアメリカの左派、中道メディアとまったく対照的です。事実はどうだったのか、現地の報道に依拠しながら、ひとつずつ追ってみましょう。

▶２１世紀当初のボリビア

2005 年モラーレスが、大統領選で勝利した当時、ボリビアは、どのような状況でしたでしょうか。人口は、871 万人、そのうちインディオと呼ばれる先住民及び混血が 87%を占め、白人は 13%を占めるに過ぎませんでした*。原住民は、30 以上の語族に別れ、主要な語族としては、ケチュア（34%）、アイマラ（23%）があり、モラーレスは、アイマラ族に属しています。スペイン語が公用語ですが、12%の原住民は理解しませんでした。主要産業は、鉱業（亜鉛、錫、金）、農業（大豆、木材、砂糖）で、亜鉛、大豆、錫、木材が輸出を支え、一次産品に依存する脆弱な経済構造を有していました。主要産業である農業では、わずか 1%農場が全農地の 82%を所有する一方、78%の農場がわずか 1%の農地を所有するにすぎないという極端な大土地所有（ラティフンディオ）が見られました(Landing Votes, p.36)。所得構造をみると、上位富裕層 10%が、全所得の 41%を占める一方、下位低所得層 40%が、全所得の 9%しか占めず、ラテンアメリカ主要国の中で最も貧富の差が激しい国でした。貧困線を一日当たり 2 ドルに設定すると全人口の 71%が貧困層（一日 2 ドル以下の所得）でした。しかもボリビアは、国営企業の国民経済への参加は 12.1%で高いほうでしたが、電気、通信、石油・天然ガス、交通など経済の基幹部門（公営企業の 95%）まで民営化した新自由主義政策が実施された結果、90 年代に入り一層貧富の差が拡大し、貧困人口も増加しました。失業率も 90 年の 5.5%から 02 年には 12.8%に増加しました。しかし、現実にはさらに多数の潜在失業者が存在していました。都市のインフォーマル・セクターも 15 年間で 10%増加し、68%に達しました（Emir Sader, Rebelión 05.12.23）。識字率は 87%、1000 人あたりの乳児死亡率は 56 人、平均寿命は 65 歳という悲惨な状況から、多国籍企業に売り渡された国の天然資源を国民の手に取り戻す運動が勢いを増しました。天然ガスを販売しても、ボリビアにはわずか 18%の収入しか残らなかったからです。

*インディオという用語は差別用語として避ける傾向がありますが、彼らが持っている特別の問題から、メキシコ・インディオの研究者清水透氏は、インディオの言葉を使った方が良いと述べています。ボリビアでは憲法で indígena originario 原住民インディオと使用されています。

ボリビアでは、大土地所有者、「ラ・ロスカ」と呼ばれる錫鉱山所有３大財閥などの少数の白人が小数の富裕層を形成し、大多数の原住民が形成する膨大な貧困層を支配するという、寡頭制社会が形成されていました。原住民は、階級的に、人種的に、二重に支配されていました。

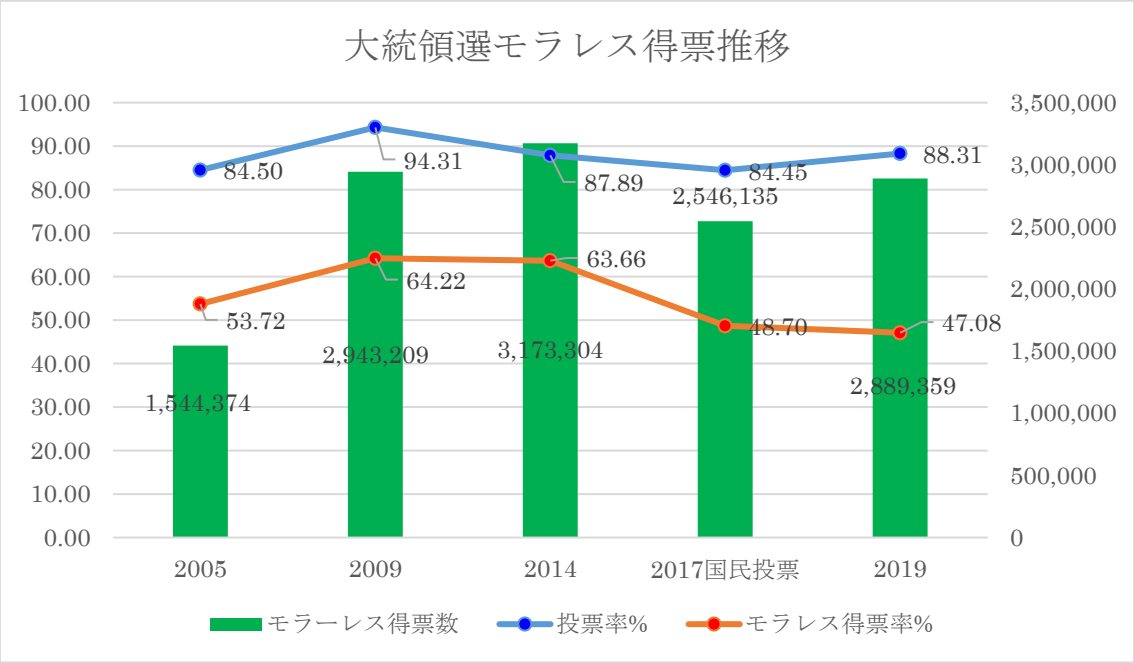
それまで、歴代政権を担ってきた民族革命運動党（MNR）、民主人民連合（UDP）、左派革命運動党（MIR）、民族民主行動党（ADN）、ボリビア自由運動党（MBL）、連帯市民連合（UCS）、愛国良心党（CONDEPA）は、いずれも寡頭制支配勢力や多国籍企業の利益を代表するものであり、大多数の貧困層のための政治は、行われてきませんでした。原住民を初めとする大多数の国民が、寡頭制支配に代わる新たな政治を求めて立ち上がったのは当然のことでした。

▶ボリビアの社会変革をめざす MAS の登場

社会主義運動（MAS）の選挙政策は、①大土地所有の解体、小農の育成、②資源の国有化、新自由主義反対、③コカ栽培農民の擁護、④国家権力の国民本位への改革、⑤腐敗した軍事・警察権力の改革、⑥教育改革と非識字者の一掃、⑦全国民への医療サービス、⑧国の主権の擁護とラテンアメリカ統合の推進、⑨真にボリビア国民の利益になる憲法制定などでした。こうしたモラーレスの選挙政策をみて、ブッシュ政権は、モラーレスや MAS の活動を、キューバのカストロの政策とベネズエラのチャベスの資金が支えていると繰り返し批判しました。

国政選挙では、社会主義運動（MAS1987 年創立）のエボ・モラーレスは、2002 年の大統領選挙で、MNR（民族革命運動）のサンチェス・デ・ロサダに敗れましたが、2005 年の大統領選挙では、PODEMOS（社会民主主義党）のホルヘ・キロガ元大統領に 25 ﾎﾟｲﾝﾄの大差をつけて勝利しました。初めての原住民大統領の誕生でした（グラフ１参照）。

（グラフ１）



出所：各種資料により筆者作成

すると、ライス米国務長官は、新大統領が「民主的に統治する」よう期待するとのべ、米国務省マクレナン報道官は、「モラーレス候補は民主主義の枠内で国家運営を行うべきである。米国は新たなボリビア政府と建設的な関係を築いて行く用意があるが、全ては新政権がどう出るかにかかっている」と干渉的発言を行いました。この背景には、米国が、常にボリビアを自己の勢力圏にある従属国と見て、干渉してきた歴史があります（Juan Ramón Quintana Taborga Coord., *Un siglo de Intervención de EEUU en Bolivia 1900-2000*, El Ministerio de la Presidencia del Estado Plurinacional de Bolivia, La Paz, 2016）。こうした米国のボリビア政策は、米国の大統領が変わっても現在までアネェス暫定大統領は、続いており、今

回のクーデター劇でも、シナリオを書いたのは、米国政府でした。

2006 年政権に就いたモラーレス大統領は、地域住民社会主義の推進を提唱し、理論家のアルバロ・ガルシア・リネア副大統領とともに貧富格差の是正，原住民の権利拡大を掲げ，社会改革を進めました。2006 年には，炭化水素資源（天然ガスが中心）の国家管理を強化する「国有化」に係わる最高政令を交付しました。また、同年モラーレス大統領はサンタクルスにおいて集会を開き、「農業革命（Revolución Agraria)」を発表するとともに、全ての鉱業資源が国家に帰属すると宣言し、ボリビア鉱山公社（COMIBOL）が、国が全ての鉱業生産・管理活動に関与することになりました。

さらに、2009 年には原住民の権利拡大，地方分権推進，農業改革・土地所有制限，天然資源の国家による所有等を定めた画期的な民主的な新憲法を 61.43%の支持を得て憲法を制定しました。特に、新憲法では、持続可能な発展をめざして健康的な環境を享受することは国民の権利であり、それを保障することは国の義務であること、環境を維持した発展の義務を明確にしています。そのため、原住民のことば「母なる大地」（パチャママ）の大切さが指摘され、環境の維持のためには「より良い生活」を求めるのでなく、「安寧な生活」を求めることが必要であると強調されています。

2009 年 12 月新憲法に基づく大統領選挙・総選挙が実施され，過去最高の 94.55%の投票率のもと，モラーレス大統領が 64%の支持率を獲得し、野党のボリビア進歩計画党(PPB、右派)のマンフレド・レイエス候補(23%)に 41 ﾎﾟｲﾝﾄ余の差をつけて圧勝しました（グラフ 1 参照）。国会議員選挙でも、社会主義運動(MAS)は、上院で 36 議席中 25 席を、下院で 130 議席中 88 議席(68%）を獲得しました。ボリビア国民は、過去 4 年間のモラーレス政権の自主的な外交、自立的な国民経済の追求、新自由主義の負の遺産とたたかい、大多数の国民の福祉を考える社会変革に取り組む姿勢を強く支持したのでした。

2013 年 4 月，モラーレス大統領が 2014 年大統領選挙に再立候補することを可能とする内容の法案を合憲とする判断がボリビア憲法裁判所によって下され，2014 年大統領選挙立候補が可能となりました。2014 年 10 月 15 政党参加の下で，大統領選挙が実施され、モラーレス大統領が 61.36%獲得し，次点のドリア・メディーナ民主統一党（UD）候補（24.23%）と 10 ﾎﾟｲﾝﾄ以上の大差をつけ当選しました（グラフ 1 参照）。また、国会議員選挙でも、MAS 党は上下両院でそれぞれ 3 分の 2 以上の議席を維持しました（グラフ 2 参照）。

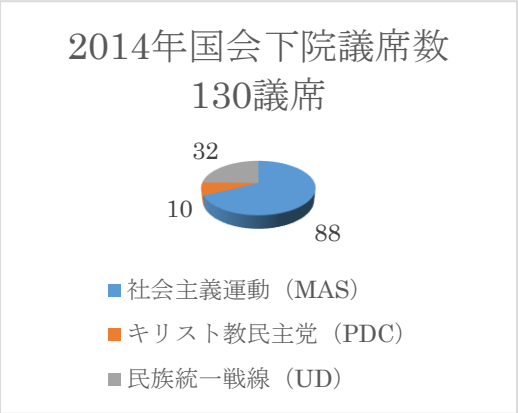
▶無期限再選の可否を問う国民投票と最高裁の判断

2016 年 2 月モラーレス大統領の再々選を可能とするための憲法改正の是非を問う国民投票が実施され，改憲反対が 51.3%、賛成が 48.7%で、僅差で否決されました（グラフ 1 参照）。そこで、MAS は憲法裁判所に対し，大統領，副大統領，国会議員，県知事等の再選禁止に係る憲法及び選挙法の条項は米州人権条約に違反し、憲法の内容に整合しないと申立て，同年 11 月，最高裁判所は再選を認める判決を下し，大統領職ほかの無期限再選が可能となり

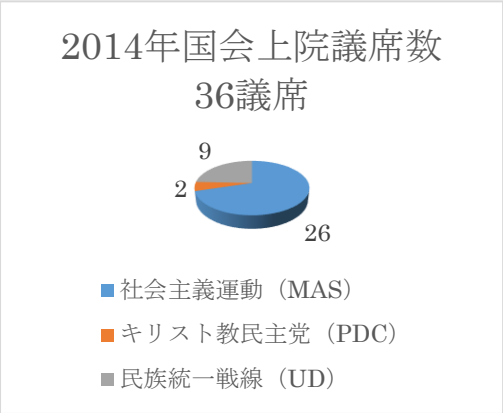
ました。一部には「4選を拒否した国民投票結果を押し切って出馬した違憲性や選挙不正など、モラーレス氏はすでに反憲法状態だった」という見解もありますが、政治的な判断の適否*は別として、法的には最高裁で無期限再選が認められており、「反憲法状態であった」とは一面的な見方です。ボリビア国内でも一部の極右を除き、野党右派勢力も一様に2019年の選挙を適法と認め選挙に参加しているのです。

*モラーレス大統領自身、4選出馬は、MAS支持者およびMASから強く押された結果受け入れたものであり、憲法的には問題がなかったが、政治的には誤りであったと、後年述べています（20.01.17 La Razón）。ルーラ元ブラジル大統領も、「モラーレスは4期目を目指して間違ってしまった。しかし、彼に対するクーデターは犯罪であると述べています（19.1122 The Guardian）。

（グラフ２）



（グラフ 3）



出所：各種資料により筆者作成

▶2019年10月時点での政治勢力図

2019年10月選挙前の時点で、国会の勢力は、下院160議席中、与党の社会主義運動（MAS）が88議席、野党の民主統一党（UD）が32議席、キリスト教民主党（PDC）が10議席、上院36議席中、与党の社会主義運動（MAS）が26議席、野党の民主統一党（UD）が9議席、キリスト教民主党（PDC）が2議席で、両院ともMASが3分の2を占めていました（グラフ2、3参照）。選挙前の各種の世論調査でも、モラーレス候補が、メサ候補よりも優勢であることを示していました（19.10.13 Cubadebate）。例えば、10月13日現在、ビアシエンシア社の調査では、モラーレス候補支持が38.8%、メサ候補支持が28.4%で、モラーレス候補はメサ候補に10ポイント以上の差をつけていました（19.10.13 el Universo）。

モラーレス大統領も、2005年年以降の3回の大統領選挙でも、国民から高い支持を受けていました。2017年の国民投票では、僅差で否決されましたが、それでも2019年の大統領選挙とほぼ同じ水準の指示を維持していました（グラフ1参照）。

こうした高いモラーレス支持は、13年間のモラーレス政権の社会政策が、広範な国民の支持を得ているからです。2006年～2019年間に、中間層は100万人増加し、全人口の10%を

占めるようになり（15.10.26 Financial Times）、絶対的貧困率は 2005 年の 38.2%から 2018 年には 17.1%に半減、同時期に貧困率も 60.6%から 34.6%に減少し、貧困のジニ係数も 0.68 から 0.48 に激減しました。貧困家庭に、無料で住宅 20 万戸が供給されました。平均寿命は 68 歳から 71 歳に延び、GDP は、90 億ドルから 400 億ドルに増加しました。本年度の経済成長も 3.9%と見込まれ、ラテンアメリカの平均 1.3%を大きく上回っています。また、無料の教育・医療などの基本的な社会サービスでも大幅な改善があります（20.01.11 Rebelión）。小農、原住民に土地が再配分され、女性の地位も著しく向上しました（Linda Farthing, in Steve Ellner ed., Latin America's Pink Tide, p.207）。

2. 大統領選挙の実施

2019 年 10 月の大統領選挙をめぐって、反政府勢力は次のグループに分かれていました。第一のグループは、極右勢力として、カルロス・サンチェス・ベルサイン（ゴンサーロ・サンチェス・デ・ロサーダ政府の官房長官）、マンフレド・レイエス（元コチャバンバ県知事）、

サンチェス・ベルサイン

マンフレド・レイエス

ブランコ・マリンコビック（サンタクルス市民委員会議長、分離独立派）などがおり、主に米国に在住し、モラーレス政権に反対。また、選挙に参加する反対派にも政府に手を貸すものとして反対。選挙中止の策謀を図っていました。第二のグループは、中道右派勢力で、ホルヘ・キロガ元大統領（2001～2002）、ルイス・カマチョなどの市民活動家で、選挙ではカ

キロガ

カマチョ

ルロス・メサを支持。選挙前後にボリビアの内外で反モラーレス活動を展開する方針を持っていました。第三のグループは、中道勢力で、オスカル・オルティス（民主統一党）、元大統

オルティス

メサ

領（2003～2005）カルロス・メサ（市民共同体）など、選挙に参加するグループ。メサ候補は、ワシントンにある米国開発庁（USAID 国務省傘下*）によって作られたインターアメリカン・ダイアローグの専門家として登録されており、ウィキリークスによれば、ボリビアの米大使館と頻繁に連絡をとっている人物でした（19.11.11 Gray Zone）。反モラーレスの労働組合、産業組合、市民を結集していましたが、グループ内では対立が見られました（19.10.09 Cubadebate）。

* USAID は、反モラーレスの市民社会に財政的支援を与えてきたことが、数々の資料で明らかとなっています（19.11.13 Gray Zone）。

その結果、2019 年の大統領選挙には、有力な候補として、エボ・モラーレス与党社会主義運動、カルロス・メサ市民共同体（CC）、チ・ヒュン・ジュンキリスト教民主党（PDC ）、オスカル・オルティス民主社会運動（MDS）など 9 名が、立候補しました。しかし、事前の世論調査では、実質的にモラーレス候補とメサ候補の一騎打ちでした。モラーレス大統領は、10 月 12 日、14 日と極右と元軍人たちによるクーデター計画があると警戒を呼び掛けていましたが、20 日、予定通り総選挙（大統領選、国会議員選）が実施されました。選挙には OAS 選挙監視団 92 名が 9 県で監視しました。

ボリビアでは、第一回目の投票で得票率 1 位候補者が、50%以上の得票を得るか、第 2 位候補者に 10 ﾎﾟｲﾝﾄ以上の差を付ければ、当選で、そうでなければ上位 2 名で決選投票を行うことになっています。

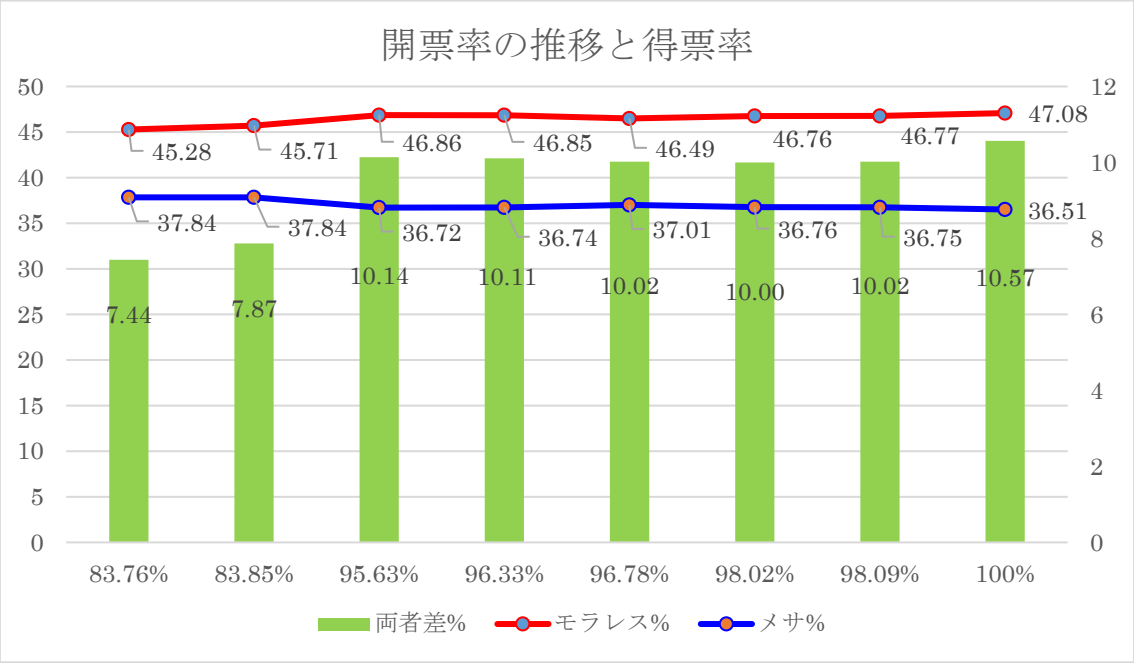
▶総選挙の開票状況の推移

ボリビアの選挙集計は 2 通りあります。①予備集計（速報）、民間企業が市民登録サービス庁で行います。これは、OAS がラテンアメリカ諸国に推薦したものです。しかし、あくまで予備集計で、不完全で、決定的なものではありません。メディアに投票動向を知らせるためのものです。もう一つは、②公式集計で、ボリビアの法律に基づき、正確なものです。投票用紙は、投票テーブルで集計され、確認書が記されます。予備集計は、市民登録サービス庁の点検者に携帯で確認書の写真とともに送付され、県選挙管理委員会に送付されます。そこで点検され、公式再集計が記録されます。各テーブルには 6 人の選挙審査員が配置され、選挙審査員は確認書に署名します。政党の立ち合いも許されます。こうした選挙投票集計システムからして、集計の不正は極めて難しいものとなっています。

20 日午後 7 時 40 分最高選挙裁判所（TSE）は、開票率の 83.76%で、得票率は、モラーレス 45,28%, メサ 38.16%でしたが、早くもメサ候補は、選挙で不正があったと証拠を示さず述べ、月曜日には激しい抗議の波が選管を襲うと述べました（グラフ 4 参照）。ガブリエル・モンターニョ保健相は、「メサ候補は、差が 10 ﾎﾟｲﾝﾄに若干足らないのを見て、不正選挙の論理を押しつけて、混乱と暴力を引きおこそうとしている。メサは、謙虚に敗北を認めなければならない。数時間経てば正式な結果が出るのに、正式な集計がないのに人為的に決戦投票を行うように押し付けている。予備集計は、どんなことがあっても、正式集計に代わることは

できない。選挙テーブルの集計記録の集計が正式集計である。メサは、農村の 100 万票以上の投票を無視して都市の票だけで勝利を歌うことはできない」と非難しました（19.10.20 ABI）。

（グラフ４）



註：開票率 83.76%から 98.09%までは予備集計、100%は、正式集計
出所：各種資料により筆者作成

21 日早朝、マリア・エウヘニア・チョケ TSE 長官は、地方の公式結果の報告が開始されはじめたので、予備集計の発表を中断しました。そのとき予備集計の開票率は、83,85% 得票率はモラーレス 45,71% 、メサ 37,84%. 差は 7.87%でした。しかし、まだ未集計の票は 100 万票残っており、しかもモラーレスの地盤の農村部の票でした。メサ候補は、予備集計が中断さえるのを見て、記者会見で、「予備集計を 100%発表する約束をしていたではないか、その約束が守られなかった」と、全国の支持者に抗議の動員を呼びかけました。すると、数分してマヌエル・カネラス通信相が、記者会見で「メサ候補に、予備集計の 100%報道の約束は、だれも行っていない、選挙の結果はまだ出ていない、全国に抗議の動員を呼びかける前に、選挙の開票結果を見てみよう。選管は、誠実に透明に集計してほしい。政党はそれを責任を持ってみてほしい」と訴えました（19.10.21 ABI）。

チョケ TSE 長官

▶混乱を引き起こした OAS 選挙監視団の発表

翌 21 日午後、TSE の本部にメサ支持者、モラーレス支持者が集まり、緊張が高まりました。午後遅く TSE は、予備集計を再開。開票率 95,63%で得票率はモラーレス 46,86%、メサ

36,72% で両者の差は 10.14 ﾎﾟｲﾝﾄに開きました（グラフ 4 参照）。するとこの中間集計が発表される中、メサ支持者は、各地で不正選挙と騒ぎ、それを取り締まる警察が発砲するところもありました（19.10.21 Cambio）。OAS 選挙監視団は、「急激な変化と予備集計結果の傾向を判断するのは難しいことに深刻に憂慮し驚いている。決選投票を推薦する」と、何らの具体的論拠も示さず、声明を発表しました（Informe de Center for Economic and Policy Research, noviembre 2019）。メサ候補は、OAS 声明に勢いづき、公式の選挙結果がないまま、決戦投票の実施を訴えました。メサ候補の支持者達は、いろいろな県の選管、市民登録サービス庁を襲撃、焼き討ちしました（19.10.22 ABI）。メサ候補は、モラーレス候補との差が開いて行っているにもかかわらず、引き続き、決選投票を訴えました（19.10.22 ABI）。

ボリビア政府のパリ外相は、OAS 選挙監視団とボリビア選挙機関（OEP）が行う投票点検の手続を行うチームの構成について合意しました。また、パリ外相は、「それ以前にその他の選挙監視団にも投票点検に同席するように要請。必要なら集計の点検の実況放送をしてもよい」と述べました（19.10.21 Cambio）。

22 日になると、野党派は、無期限のゼネストを呼びかけました。前日、OAS は、記者会見で急激な変化に驚き、憂慮していると述べ、TSE は、投票の監査をすると回答しましたが、アントニオ・コスタ TSE 副議長は、辞任を発表しました。パリ外相は、OAS に投票結果の点検を要請するとともに、アルゼンチン、ブラジル、米国、英国にも関心があれば投票結果を調査されたいと案内を送りました（19.10.22 ABI）。夜、反対派は、選挙の不正を訴え、ラパスの MAS の選挙事務所を取り巻き抗議しました。

23 日になると、モラーレス大統領は、「右翼によりクーデターが進められている。民主主義を守ろう」と警告しました。各地で反対派によるストが行われ、両派の衝突が見られました。OAS は、選挙結果の予備報告を発表し、「予備集計の傾向の急激な変化は、説明が困難で他の措置と一致しない。開票が進むと結果が変わり、議論を呼んでいるので、決戦投票が望ましい。意見が両極に分かれており、選挙結果への不信、透明性の欠如、小競り合いの不安、僅差が、高い政治的社会的緊張をもたらしている。10 ﾎﾟｲﾝﾄの差がなくても、差があっても決戦投票が望ましい」と報告しました。OAS は、今度は、ボリビアの規定にかかわらず、ともかく決選投票を行うように主張し、もともともっている考えが現れでたものでした。サルバティエラ上院議長は、「OAS の選挙監視員は、権限以上の予備報告を行っている。それは、あくまで予備集計であり、決定ではない」と予備報告を批判しました。記者会見で、モラーレス大統領は、「メサは選挙結果予備集計では、勝利したといっているが、われわれは、TSE の正式報告を待っている。われわれは農村で強い」と最終的な勝利の確信を表明しました（19.10.23 Cubadebate）。

▶海外からの政治的な介入と与野党の激しい衝突

21 日極右のマルコ・ルビオ米国共和党上院議員は、モラーレス候補が選挙結果を操作している証拠があり、選挙結果を憂慮していると、証拠も示さずデマ攻撃を行いました。OAS 常

設委員会では、アルゼンチン、ブラジル、カナダ、コロンビア、コスタリカ、米国、エクアドルが、OAS 選挙管理団から提出された選挙予備報告を支持し、選挙結果には同意しないと発表しました。しかし、このとき、開票率 95,63% で得票率はモラーレス 46,85%、メサ 36,74%で 差は 10.11 ポイントとなっており、予備集計はモラーレスが勝利する見通しを示していました。

メキシコ OAS 代表は、「OAS の選挙監視団は、客観的・中立的立場の原則から離れている」と批判。開票率 96,78%で、得票率はモラーレス 46,49% 、メサ 37,01% 差 10.02 ポイントとなっていましたが（19.10.23 ABI）、アルゼンチン、ブラジル、カナダ、コロンビア、コスタリカ、米国、エクアドルは、集計結果に不同意を表明しました。モラーレス大統領は、OAS の行動を、クーデターのようなものと批判。一方、カルロス・トルヒージョ米国大使は、集計が遅れているのは、モラーレスが負けつつあるからだと述べました（19.10.25 Granma）。

開票が進み、開票率は 98,02%で、得票率はモラーレス 46,76% 、メサ 36,76% 、差は 10,00 ポイントで、10 ポイント台が維持されました（19.10.24 La Jornada）。しかし、モラーレス支持派とメサ支持派は、反対派の拠点、サンタクルス県で激しく衝突しました。反対派は、サンタクルスで無期限のストが行いました。モラーレス大統領は、メサ候補が海外の右翼の支持を得てクーデターを企んでいると強硬に非難しました。また、民主主義の擁護を訴え、ラパスの TSE の周辺を武装した反対派が取り巻いたことから、ラパスへのコチャバンバの軍隊の支援を要請しました。反対派は、全国で不正選挙と騒ぎ、チュキサカ県では、選管事務所を焼き討ちしました。メサ候補は、「モラーレスが決選投票を確認するまで、引き続き抗議しよう、選挙の不正の証拠を提出する」と述べました（19.10.24 La Jornada）。

この日以降、経済活動が停滞し、各地の都市や道路で封鎖が行われました。暴力が激化し、反対派は、要求を転換し、モラーレス大統領の辞任を求めるようになりました（19.10.23 ABI）。

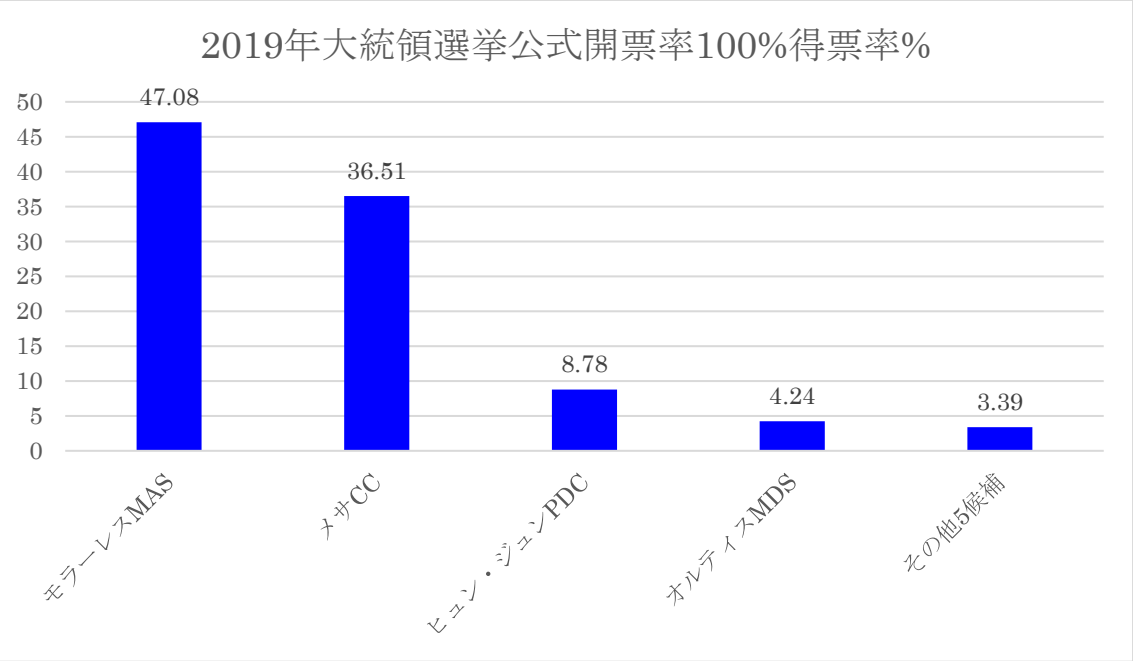
24 日になると、開票率 98,09 %で、得票率はモラーレス 46,77% 、メサ 36,75%。差は 10,02 ポイントと、10 ポイント以上が維持されました（グラフ 4 参照。100%公式集計が出るのは 10 月 25 日）。OAS は、30 人余の専門官が、集計の監査を開始し、全監査には 2 週間必要、監査には国連、ドイツ、フランス、米国、ロシアが立ち会うと発表しました（19.11.02 Telesur）。メサ候補は、憲法を遵守しないのはモラーレスだと批判し、各地で両派の衝突が続きました。

▶モラーレス当選を証明した最終公式発表

10 月 25 日、TSE より、公式集計の開票率 100 %で、得票率はモラーレス 47.08%、メサ

36,51%、 10,57 ﾎﾟｲﾝﾄの差と発表されました（グラフ 4、5 参照）。公式集計も、間断なく行われましたが、予備集計を類似した傾向を示しており、公式集計の結果は、疑問の余地がないものでした（Informe de Center for Economic and Policy Research, noviembre 2019）。ミシガン大学のウォルター・メベイン教授、OAS がだしている集計疑問に反論し、集計不正はないと断言しました（19.11.13 Pressenza）。

（グラフ 5）



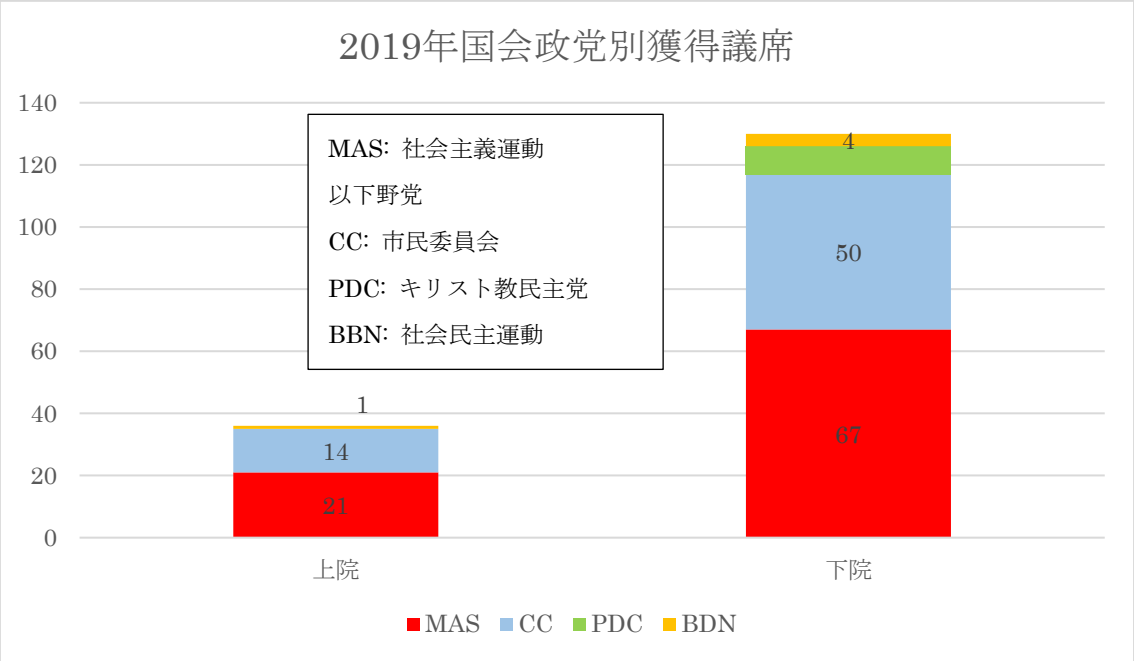
出所：各種資料により筆者作成

国会の議席も、与党の MAS-IPSP は議席を減らすも、上院の 130 議席中 68 議席、下院の 36 議席中 21 議席獲得を獲得しました（グラフ 6 参照）。

この大統領選、国会選挙の結果を見れば、国民の多数が与党を支持しているのは明らかでした。しかし、反対派は、OAS、EU、米国、コロンビア、アルゼンチンなどの国際的な支持をよりどころとして、強引に決戦投票を要求し、道路封鎖を継続し、両派の衝突は、その後も数日間続きました。

モラーレス大統領は、BoliviaTV との記者会見で、「本当の選挙不正は、TSE 選管事務所を焼き討ちしていることだと指摘。開票率 99.99%で勝利しているのは、モラーレスでなく、国民だ」と述べました。ガブリエラ・モンターニョ保健相は、メサとカルロス・アラルコン（元メサ内閣の公共事業相）に「選挙の不正常な証拠を出してほしい。アラルコンが指摘した報告書は、MAS の下院議員の投票をモラーレスの投票と記載した間違いで、アラルコンが言うようにメサ候補（CC）の得票ではないと反論しました（19.10.25 Prensa Latina）。

（グラフ６）



出所：各種資料により筆者作成

▶選挙結果を認めない過激派野党、暴動に走る

31 日になると、OAS は、ボリビア政府が要請している、投票の再集計を開始しました。しかし、今度は、反対派が再集計を拒否しました。再集計すると差が 10 ﾟｲﾄ以上になることを知っているからでしょう。翌日、アルトゥーロ・エスピノサ OAS 選挙監視団団長が、モラーレス候補を公然と批判する記事を公開するとともに、辞任しました。2 日なると、市民活動家でメサ候補を支持した過激派の人種差別主義者、ルイス・フェルナンド・カマチョが、反対派の最も急進的な人物として現れ、「軍と警察に人々の側に立つよう」呼びかけ、モラーレスの辞任を強硬に要求しました。さらにカマチョは、過激なスト、道路封鎖を呼びかけました（19.11.05 Reuters）。一方、モラーレス大統領は、軍に政府を支持し、ボリビア国民に奉仕するよう呼びかけました。

メサ　　カマチョ

ところが、11 月 3 日なると、野党の市民派、政治家、元軍人、米国と関係する 16 人の会話録音が公開されました。それは、モラーレス大統領の続投を防ぐため、総選挙前後に社会的騒擾をあおることを計画しているものでした（詳細は後述、19.11.03 Erbol）。6 日になると、コチャバンバで暴力的な衝突が繰り返され、その他の地方でも道路封鎖が行われました。ビントでは、反対派のデモ参加者が、市庁舎を放火し、パトリシア・アルセ市長（MAS）が、裸足で逃げ出す事件が発生しました。

8 日、コチャバンバ、スクレ、サンタクルス県の警察の 3 部隊が、反政府側に回りました。ラパスでは、警察は、反政府派のデモ参加者に支持を示しました。モラーレス大統領は、「クーデターが進められている、しかし、政府は、暴動者に軍事的鎮圧は行わない」と述べました。

▶警察、軍部の一部、野党に加わる

翌 9 日、コチャバンバの戦術警察作戦隊が、反政府暴動派に加わり、新たな司令官を任命するようモラーレス大統領に要求しました。モラーレス大統領は、反対勢力に対話を呼びかけましたが、反政府勢力はそれを聞かず、他の複数の県の警官隊も反政府派に加わりました。反政府暴力グループによりオルーロ県知事ビクトル・ウーゴの家が 焼き討ちにあいました（19.11.10 ABI）。モラーレス大統領は、クーデターが近づいているとして、民主主義を擁護するために平和的動員を訴えました。国会の議席を獲得した 4 党、MAS、CC、PDC、BDN に会議を呼びかけ、鎮静化するために討議を呼びかけました。また国際機関、ローマ教皇が対話の仲介をとるよう要請しました。モラーレス大統領は、「現状は、市民委員会、野党、国家警察、極右によりクーデターが進められている。選挙の票の点検が進められているが 11 月 12 日までかかる予定である。国家警察は、国民の安全を保障するよう要請する」と述べました（19.11.09 Cubadebate）。また、コチャバンバで、ある軍人が、大統領の身柄引き渡しに 50,000 ドルの賞金が欠けられていると電話連絡があったとモラーレス大統領に語りました（19.11.12 La Jornada, 19.11.12 Granma）。

モラーレス支持者とメサ支持者の衝突

ノーム・チョムスキーとビジャイ・プラッシャド（インド出身のマルクス主義歴史学者）は、「一部の軍部、警察によるクーデターの危険が高まっている。クーデターは、米国に支配されたボリビアの寡頭制支配層により進められている。ラパスの米国大使館の作戦センターは、二つの作戦を作成している。A 計画（クーデター）と B 計画（モラーレスの暗殺）である」という声明を発表しました（19.11.09 Peoples Dispatch）。

3. クーデター計画の存在

確かに米国国務省主導のクーデターが進んでいたのです。それは、明らかとなった資料では次のようなものでした。

▶20 年代の米州における反転攻勢の一つとしてクーデター

このクーデター計画を理解するためには、このクーデターをボリビアの独自の事情から突然単発的に出てきたものと考えると、クーデターの本質を理解できないと筆者は考えています。

2000 年代に入り、ラテンアメリカで、ベネズエラ、ブラジル、アルゼンチン、ウルグアイ、

ボリビア、エルサルバドル、ニカラグアに左派政権が輩出したことから、2008 年から米国主導の下に、右派勢力からの反転攻勢が開始されました。3 月アルゼンチンのロサリオに保守派の自由基金セミナー会議が開かれました。会議には、ロジャー・ノリエガ米元西半球担当国務次官、アスナール元スペイン首相、フォックス元メキシコ大統領、ルイス・ラカージェ元ウルグアイ大統領、キロガ元ボリビア大統領、フローレス元エルサルバドル大統領、ウルタード元エクアドル大統領、カスタネェーダ元メキシコ外相、作家バルガス・リョサ、モンタネール亡命キューバ人作家などの国際的に著名な反動政治家・文化人が、ラテンアメリカにおける左翼勢力の進出について議論しました。セミナーには米国の保守的シンクタンク、ヘリテージ財団、アトラス経済調査基金、ケイトー研究所なども参加しました。会議は、今後「大陸規模の反攻」を進める必要があることで一致しました（拙稿「21 世紀のラテンアメリカ・カリブ海における進歩と反動の弁証法」、雑誌『季論 21 』2019 年秋季号所収、参照）。

この反転攻勢では、左派政権の弱点、誤りに乗じて、メディア、反政府勢力を結集して左派勢力の打倒を図ることが決められました。反転攻勢の政策の具体的な実行は、2009 年のホンジュラスのセラヤ大統領の放逐クーデター、2012 年 6 月パラグアイの中道左派政権のフェルナンド・ルーゴ大統領の、上院の弾劾決議による罷免、2014 年 3 月のブラジルでの、ルーラ大統領汚職疑惑の捏造、続いて 2016 年 5 月ルセフ大統領を政府会計の不正操作の言いがかりで、180 日間の職務停止事件、米国の調略戦略によるエクアドルのレニン・モレーノの右旋回、2017 年 4 月のベネズエラで最高裁の憲法判断の誤りを捉えた（4 日後すぐ訂正）4 カ月続いた過激な反政府行動、2018 年 4 月ニカラグアでの政府の年金政策の誤り（5 日後に訂正）に乗じた、2 カ月続いた過激な反政府破壊活動などがあります。今回の奇妙なクーデター事件は、こうした反転攻勢の文脈の中で出てきたものです。

▶クーデター計画の作成

クーデター計画は、このように作成されたものと思われます。

2019 年 7 月、オライリー米国務省西半球担当次官補がボリビアに来訪し，パリ外務大臣と会合し，「ボリビアの将来を決定する上で，民主的で透明性があり，不干渉のプロセスを通じ，ボリビア国民の主権を尊重する。米国は特定の候補者や政党を支持しない。新たに選出される政府と強固な関係を構築する」と述べました。しかし、裏側では、米国によるクーデター作戦が着々と進んでいました。今回のクーデターのスタートとして、19 年 7 月から 8 月にかけて、モラーレス政権転覆のために米国務省高官が、米国人ジョージ・エリ・ブラインボーム（親イスラエル派の国際政治コンサルタント）と、秘密会議をもちました。そして、10 月初め、ブラインボーム・チームが、ボリビアの不安定工作のためサンタクルスに派遣され

ラパスの米国大使館

ました（19.10.01 La Época）。主目的は、民主統一党のオスカル・オルティス候補を支援すること、そのため、米大使館員のオルソンと関係があるジャニッセ・バカ・ダサ（反政府 NGO 幹部）と接触することでした。オルティス候補が、米国のクーデター計画の実行の中心人物でした。エリック・フォランダ・プリエト（ボリビア人、元駐ボリビア米大使館勤務員）が、米国大使館の指示で秘密裏にオルティスの選挙参謀をしていました。元大統領のホルヘ・キロガ、市民運動家のルイス・カマチョなどは、市民共同体カルロス・メサを支持し、選挙後も反モラーレス運動を進める計画でした。

エリック・フォランダ・プリエト

さらに、明らかとなった詳細な資料によれば、米国クーデター計画では、クーデターは 2019 年の末から 2020 年の 3 月までに実行するというものです。主要な活動家は、極右派のゴンサロ・サンチェス・デ・ロサーダ（元大統領 2002～2003）、マンフレド・レイエス（元コチャバンバ県知事）、マリオ・コシオ（元タリハ県長官）、カルロス・サンチェス・ベルサイン（ゴンサロ・サンチェス・デ・ロサーダ政府の官房長官）です。このグループは今回の大統領選挙そのものに反対でした（19.10.09 CD）。在ボリビア米国大使館のマリーネ・スコット（大使館次席）とロルフ・オルソン（政務参事官）*は、ブラジル、アルゼンチン、パラグアイの外交官高官とボリビア政府反対を進めるため会議を持ちました。作戦は、次の三段階に練られました（19.10.23 Postcuba, 19.11.03 Erbol, 19.11.11 kontrainfo）。

*オルソン参事官とともにアネット・ドロシー・ブラックスリー米大使館員も CIA のラパス支局員で、ラパスにあるアルゼンチンの諜報機関（AFI）支局のホセ・サンチェスと協力して反モラーレス、キューバ、ベネズエラ、ニカラグア情報を収集していたといわれています（20.01.30 Behind Back to Doors）。

第 1 段階：

19 年 4 月から 7 月までに第 2 、第 3 段階のための反政府勢力の同盟を確立する。反対派のメディアを駆使してモラーレス政権の信用を落とす。ラウル・レイエス・リベロ（市民委員会調整役）がフェイクニュースを流す。ジャニッセ・バカ・ダサ（反政府 NGO 幹部、ロルフ・オルソン米参事官と直接の関係あり）、オマール・ドゥラン（反政府派弁護士）、フランク・スーセック・メドゥラーノ（米州開発基金勤務）と接触する。キロガ元大統領は、OAS、CIDH（米州人権委員会）、EU などの国際機関の支援を受けるように活動する。

第 2 段階：

19 年 7 月から 10 月の間、ボリビアで不安定な状況を作る。これは、19 年 10 月に実行された。市民委員会、反モラーレス 21F 運動を利用して、過激な暴力的あるいは平和的なデモ、道路封鎖、ストを行う。フアン・フローレス市民委員会議長が中心。10 月の選挙を妨害し、その後も政府の活動を妨害する。軍、警察を分断する。クーデターを支持するものを勧誘する。選挙前にすでにモラーレス側近の人物も勧誘し終わる。彼らは、モラーレスにはニセ情報を流す。

第 3 段階：
選挙不正を宣言し、二重政府を樹立する。米国国務省、また米政府の別の機関は、モラーレスが勝利すると予測している。そのために米国大使館は不正選挙と宣言するための客観的主観的状況を事前に作ってきた。マリーネ・スコット米大使館次席は、ボリビア在住のブラジル、アルゼンチン、パラグアイ、コロンビア、スペイン、エクアドル、イギリス、チリの外交官とオフレコで打ち合わせを行い、不正選挙と非難するように要請した。また TSE の不正集計を入手するよう計画している。2020 年モラーレスが大統領に就任した後、ワルド・アルバラシン全国民主連盟議長（反政府派）を指導者として軍の一部を推進し、軍民政府の二重政府を樹立する。MAS を排除して 90 日以内の選挙をめざす。その選挙の候補者とするために、米国政府は、民主社会運動（MDS）のオスカル・オルティスを秘密裏に準備してきた。

11 月初め、このクーデター計画を裏付ける資料が暴露されました。そこでは、10 月初めと思われる反政府勢力の市民派、政治家、元軍人、米国関係者の 16 の会話録音が編集されています。それらは、モラーレス大統領の続投を防ぐため、総選挙前後に次のように、社会的騒擾をあおるものです（19.10.08 Behind Back Doors, 19.11.03 Erbol）。

ある元大統領（特定されず）、マンフレド・レイエス・ビジャ旧コチャバンバ長官・元大統領選挙候補者、マウリシオ・ムニョス元コチャバンバ新共和国勢力党（右派政党）上院議員の会話、さらに元軍人のオスカル・パセジョ・アギレ元大佐、レンベルト・シレス元将軍、フリオ・セサル・マルドナド元大佐、テオバルド・カルドソ元大佐の会話が録音されています。これら旧軍人 4 名は米国の米州軍事アカデミーの卒業生で、マンフレド・レイエス（元コチャバンバ県知事）と密接な関係をもっています。会話の一つは、反政府活動家のミリアム・ペレイラのものと特定され、彼女はフアン・フローレス市民委員会議長達が米国に行き、カルロス・サンチェス・ベルサイン（元ゴンサロ・サンチェス・デ・ロサーダ政府の官房長官）と会い、活動のため米政府から 50 万ドル受け取るように語っています。

米州軍事アカデミーの卒業式

ボリビア警察と FBI との交流

録音のひとつは、マンフレド・レイエス（米州学校出身）で米国の共和党上院議員との会話。彼は、マルコ・ルビオ、ボブ・メネンデス、テッド・クルスといった共和党極右上院議員と関係があり、モラーレスが当選すればボリビアに制裁を科す約束をしています。モラーレスが辞任した場合、レイエスと関係があるマウリシオ・ムニョスは帰国して

コチャバンバ知事に立候補すると述べています。また、ある録音は、元大統領（特定されず）に、「反対運動が大きくなれば軍はそれに従うと、ボリビアの敵はキューバであり、キューバよ出て行けといわなければならない、軍と警察のなかに積極的支持者がいる、反対運動は、福音派の教会とブラジルのボルソナーロ政府の支持を受けつつある」と語っています。

アリエル・バステイロ元在ボリビア・アルゼンチン大使は、クーデターは、CIA を通じ NGO から資金を供給されていると断言しています（19.11.11 Página 12）。

4. 警察・軍の蹶起とモラーレス政権中枢部の破壊

▶クーデターの実行

11 月 10 日、クーデター計画が実行され、反対派は、ボリビア全土で過激な破壊活動を行い、全国が騒然とした状態となりました。午前 2 時、OAS のチリ人のクリストバル・フェルナンデス集計監査調整役責任者が、SNS で予備報告を早めてと送ると連絡しました。午前 6 時 OAS は、選挙結果の予備監査報告を発表しました。その報告では、「新たな TSE メンバーのもとに再選挙を勧告し、平和的な抗議は保証されなければならない。モラーレスが首位、メサが二位である可能性はあるが、両者に 10%以上差があるとは統計的に証明できない」と報告しました（19.11.10 El Cambio）。

しかし、アルゼンチンの次期大統領のアルベルト・フェルナンデスは、「OAS の報告書には不正常なものがあり、OAS はボリビア危機に大きな責任がある、クーデターを招いた責任がある」と報道しました(19.11.17 Clarín)。またアルマグロ OAS 事務総長に監査を依頼されたアルゼンチン人ヘロニモ・ウスタロスとサンティアゴ・エグレンは、「OAS の報告には技術的な説明がない。正式な投票確認書と照合する必要があると」主張するも、受け入れられませんでした。アルマルゴ OAS 事務総長は、アルゼンチン人の二人はスパイだと証拠を上げず非難しました（19.11.17 Clarín)。

10 日午前 9 時、騒然とした状況の中で、モラーレス大統領は、記者会見で、「ボリビア労働者センター（COB）及びその他の社会勢力の批判を受け入れ、TSE 全員を更迭する、また総選挙を行う。そのため、近く国会でそのための措置を取る。現在第一に重要なことは、ボリビアを平穏化することである、マスコミも平穏化に協力してほしい」と述べました（19.11.10 ABI, Cubadebate）。

午前中、モラーレス大統領の閣僚、MAS 幹部の多くが、クーデター派に自身と家族の危険を脅迫され、辞任しました。セサル・ナバロ鉱業相は、甥が暴行を受け、家族の生命が第一という理由で辞任。MAS のビクトル・ボルダ下院議長も住宅を焼き討ちされ、兄弟が誘拐され辞任を発表しました（19.11.10 La Razon）。モラーレス大統領自身も、警察による自身への逮捕の動き、正副大統領に 5 万ドルの身代金がかかっているとの通告により脅迫を受け、コチャバンバの家族、妹エステルの家、自身の家、MAS の選挙事務所、選挙結果報告書が焼かれました。モラーレス大統領は、市民・政治・軍事クーデターが起きていることを国際

報道は伝えてほしいと発表しました。

正午ごろ、モラーレス大統領は、パナメリカーナ・ラジオとのインタビューで「私には憲法上の役割がある。来年の１月 21 日まで任期がある」と辞任を否定しました（19.11.10 La Razon）。午後４時頃、軍が社会的平和を復活させるために TSE の幹部に辞任を求める声明を発表、その後ユリ・カルデロン（米州警察学校出身）全国警察司令官警察が、検察の要望に応えて、TSE の幹部を逮捕する人員を配置したと述べました（19.11.10. ABI15:24）。この時から反政府派の攻勢により潮目が変わりました。カルロス・ロメロ政府官房長官は、「警察の一部が、数日前から反政府政策に転換し、今日は政治的に反政府行動を決定したと発表しました（11.10 ABI 15:41）。マルセロ・アルセ観光副大臣、マリア・エウヘニア・チョケ TSE 総裁、マリアーナ・プラド計画相、レネ・ホアキノ上院議員、ポトシ県知事フアン・カルロス・セハスが、反政府の暴力的脅迫により、相次いで辞任しました。夜、TSE 総裁マリア・エウヘニア・チョケ、副総裁アントニオ・コスタス（10 月 22 日辞任済み）が、ラパスから逃亡するところを警察により逮捕されました。この逮捕は、犯罪及び諜報分析庁（DACI）と検察総長により指示されました。MAS は、極右による MAS 指導者への迫害として、これに抗議しましたが、公共省の指示で行っているとユリ・カルデロン警察署長は反論しました。ウイリアム・アラベ、ラパス県検察長は、逮捕命令が出された後、逮捕を警察に指示したと説明しました。アラベ検察長は、チョケ、コスタス逮捕の場面をマスコミに見せて、検察は、文書の捏造、情報操作、選挙結果のごまかしを調査していると語りました（19.11.10 ABI）。

チョケ逮捕の場面

この日早朝に OAS の予備報告が出された後、サンタクルスのカマチョ、ポトシのマルコ・アントニオ・プマリ市民委員会議長（企業経営者）がモラーレス大統領の辞任を求め始めました。プマリは、警察に、モラーレスを拘留するように要求しました（19.11.10 La Razon）。その後、ラパスの警察動員技術部隊（UTOP)事務所で、警官の高官たちが暴動に参加すると記者会見を行いました。サンタクルス県知事、ルベン・コスタス、ホルヘ・キロガ元大統領もモラーレス・アルバロの辞任を要求しました。午後 7 時過ぎ、検察は、TSE が文書を偽造し、情報を捏造し、集計結果を捏造あるいは隠匿し、選挙人名簿を修正したとして調査を開始したと発表しました（19.11.10 ABI19:52）。この時間から国営通信社 ABI は、クーデター寄りの報道となりました。政府系新聞のカンビオ紙の報道も、反対派寄りと

焼き討ちに合った MAS 幹部の家

なりました。テレビ局アビヤ・ヤラ局も反政府が襲撃し、数日間放送を中断すると発表。テレビ局ボリビア、ラジオ局パトリア・ヌエバが、反政府派により、暴力で占拠されました（19.12.06 Granma）。ボリビア通信公社は、革新系の国際通信社のテレスル放送をボリビアで禁止すると発表しました。ロシアの通信社の RT もサンタクルスで放送が停止されました（19.12.06 Granma）。反政府派は、マスコミをほぼ手中に入れたのです。ベネズエラ大使館も、暴力グループによりダイナマイト攻撃を受けました（19.11.10 ABI20:07）。

▶モラーレス大統領辞任に追い込まれる

午後 9 時過ぎ、MAS のメンバー、住宅への攻撃がますますひどくなり、家族の人命が危険となりました（19.11.10ABI 21:53）。モラーレス大統領は、アルバロ・ガルシア・リネア副大統領とともに、軍（辞任要求の声明を発表 TS）、警察、政府派であったフアン・カルロス・グアラチ COB 書記長にも辞任を要請され、ボリビア TV を通じ辞任を発表しました。大統領は、暴力が拡大しているのを抑えるためであり、これは、市民・政治家・警察のクーデターと述べました。しかし、アルマグロ OAS 事務総長とリマ・グループは、モラーレス大統領の辞任には一言も触れませんでした（19.11.12 Granma）。モラーレス大統領は、辞任発表後、メサとカマチョに、「目的を果たしたのだから、これ以上兄弟の家を焼き討ちしたり、指導者の妻や子供をいじめたり、家族の家から略奪したりしないよう指示をだすように」要請しました。過激者、人種差別グループは、各地でインディオに対する差別的な言葉を繰り返し叫びました（ABI 11.10 18:57）。

反対派の焼き討ち攻撃

大統領に続き、アドリアーナ・サルバティエラ上院議長が SNS クーデターの恐れがあり、同志たちが暴力を受けているという理由で、辞任を表明しました（19.11.10 ABI 19:40）。カマチョは、「パチャママ（原住民の言葉で母なる大地の意味）は再びボリビアに帰ることはない、ボリビアはキリストに帰属するのだ」と述べました（19.11.11 Gray Zone）。カマチョの支持者たち、右派の各地集会で、原住民アイマラ族の旗であり、憲法でボリビア国家のシンボルと規定されているウィパラを焼きました。カマチョは、人種差別主義者、分離独立派で、キリスト教福音派の准軍事組織と関係があるといわれています（19.11.11 Gray Zone）。今回のクーデターが白人富裕寡頭支配層によるクーデターといわれる所以です。あるいは、こうした巧妙なクーデターを、体制変換を図るハイブリッド戦争だと断罪しているのは、参考になります（Andrew Korybko, The Geostrategic Consequences of the Hybrid War on Bolivia, 19.11.14 Global Research）。

サルバティエラ上院議長

暴動をあおるカマチョ

10 日夜、カマチョが、軍、警察がモラーレス逮捕の命令を出していると述べたことを否定して、ボリビア警察司令官ユリ・カルデロンは、モラーレスや閣僚の逮捕の命令は出ていないと述べました。フアン・ランチパ・ポンセ検事総長から、選挙違反に関係した県の選挙管理委員長、選挙裁判所の幹部は捜索し検挙するように指示を受けていると述べました（19.11.11 Granma）。夜半、政府派、野党派の衝突が、各地で発生し激化しました。

メキシコ、エブラルド外相は、ボリビア政府の閣僚・国会議員 20 名をラパス大使公邸に保護したと発表しました（19.11.11 RT）。

11 日になると、各地で反政府派の暴動が激しく行われました。午前 9 時、各地の暴動支持派の警官の要求によりユリ・カルデロン警察司令官が辞任しました（19.11.11. ABI）。午前 10 時、カマチョが、「モラーレス逮捕の命令が出されていることが確認された。軍部は、大統領専用機を差し押さえた。モラーレスは、チャパレに潜入している」とツイッターで述べました。ラパスの警察司令官、ホセ・アントニオ・バレネチェアは、抗議行動を制圧できないので、ウイリアムズ・カリマン軍司令官に介入を要請しました。

▶モラーレス辞任についての各国の報道

ロシア政府は、説明不足で、アネェス暫定政府を承認するニュースが流れましたが（19.11.14 DW）、間違いで、「モラーレス大統領の辞任をクーデターによるもので、反対派の呼応した暴力がモラーレス大統領を辞任させた。これはクーデターだ」と批判しました（19.11.11 Perfil, La Razon）。中国は、「憲法の枠内で意見の違いを解決するよう、政治的解決を擁護する」と発表しました（19.11.11 Cambio, Plensa Latina）。国連は、「事態を定義づける状況にはない。事態を深刻に憂慮している」と、ファルハン・ハック事務総長報道官は述べました（19.11.13 Infobae）。EU のモゲリーニ EU 外務・安全保障政策上級代表は、「双方が慎重に行動し、公正な選挙の道を見出すように要請する」と発表（19.11.11 La Razón）。日本の外務省は、12 日外務報道官談話で、「ボリビアの全ての関係者に対して，暴力を控えることを要請するとともに，ボリビア国民の意思を反映し，法の支配と民主主義を遵守する形で，事態が早期かつ平和裏に収束することを期待する」報道しました。

トランプ大統領は、ホワイトハウスの声明で、モラーレスの辞任を歓迎し、クーデターについて触れず、「西半球の民主主義にとって重要な時である。憲法を守ったボリビア軍を祝福する。この事件は、ベネズエラとニカラグアの正当性がない体制には強力なシグナルだ」と熱狂して述べました（19.11.11 Página12）。午前中、OAS の会議が定足数に達しないまま開催されました。この会議の前に、ボリビア OAS 大使ホセ・アルベルト・ゴンサレスは辞任。

参加国は、アルゼンチン、ブラジル、カナダ、チリ、コロンビア、コスタリカ、エクアドル、アメリカ、グアテマラ、ガイアナ、ホンジュラス、パナマ、パラグアイ、ペルー、グアイドー・ベネズエラの 15 ヵ国でした。ニカラグア代表は、「OAS は、ボリビアの憲法秩序の破壊について、OAS 憲章に従った客観的、合理的、一貫した声明を出さねばならない、干渉主義を批判しなければならない、国際社会は、暴力的、ファシズムと寡頭制支配を熱望した」と主張しました。OAS 会議は、ボリビアは、緊急に選挙を実施するために臨時大統領を選出するよう、勧告しました（19.11.12 ABI , 19.11.13 La Jornada）。

一方、米国の民主党のオカシオ＝コルテス、イラン・オマール（ミネソタ州選出下院議員、初のムスリム議員、女性）は、明確にクーデターと非難し、自由・公正な選挙を呼びかけました。コルテス議員は、「今ボリビアで起きていることは民主主義ではない、クーデターだ」と述べました。また、アヤンナ・プレスリー（アフリカ系民主党下院議員）、ラシダ・トライブ（民主党下院議員、イスラム教徒）もそれに同調しました（19.11.11 Página 12）。

5. アネェス暫定政権の成立

▶アネェス上院副議長、突然大統領を自己宣言

11 日午後 4 時 52 分、ジャニーネ・アネェス上院副議長（52 歳。ベニ県出身。民主同盟 CD）が、突如、サンタクルスで大統領を自己宣言し、翌日に上院を招集する、ただ選挙を行うだけが目的と述べました。しかし、憲法第 169 条では、大統領不在の場合、副大統領、上院議長、下院議長が継承するとなっており。その後の規定はありません。この時点で、サルバティエラ上院議長、ボルダ下院議長とも辞任を表明してはいましたが、正式に辞任届を提出し、議会で承認されてはいませんでした（13 日 MAS のサルバティエラ上院議長が現れて、辞任届を提出しておらず、辞任していないと述べています）。ボルダ下院議長が辞任後スサーナ・リベロ（MAS）が下院議長を継承し、スサーナ議長は辞任してはいませんでした。一般には、ディエゴ・パリ外相（当時）がいうように、議長が不在の場合、国会で新たな両院議長を選出し、国会を開き、そこで暫定大統領を選出するものであると考えられています。また暫定大統領は、憲法に従って、90 日以内に大統領選挙を実施しなければなりませんが、アネェスは、選挙を行うことが目的といいつつも、その期限に言及することはありませんでした（19.11.12 Granma, 19.11.14 RT, 19.11.15 HispanTV）。

暫定大統領を自己宣言するアネェス

こうしたアネェス副議長の大統領自己宣言は、かなり無理筋のものでしたが、そこまでして MAS 支配体制を転覆したい、クーデター計画者達の強い思いがあったのでした。アネェス副議長は、元テレビ Totalvisión のアナウンサーで、理事、弁護士、2008 年のボリビアの東部 4 県の独立の動きを推進した右翼政治家です。ウィパラや原住民の運動を蔑視する人種差別主義者でもあります。モラーレス前大統領は、「歴史上最も狡猾で有害なクーデターであ

る。アネェスでもって、クーデターは完成した」とクーデターの本質を指摘しています。

▶アネェス暫定政権対する各国の反応

エルネスト・アラウジョ、ブラジル外相、米国のトランプ政権、ベネズエラのグアイドー国会議長は、直ちにアネェス暫定大統領を承認しました。トランプ政権は、クーデターを支持しただけでなく、「われわれは、それを行った。昨日のボリビアのモラーレス大統領の辞任は西半球にとって重要な瞬間である」と述べ、クーデターへの関与を示唆しました（19.11.12 Madhya Pradesh News）。グアイドー国会議長は、ベネズエラの「正当的政府大統領」として、アネェス政権を承認しました。イギリス、ドイツ、ブラジル、コロンビア、イギリスもアネェス暫定大統領を承認しました。

一方、ベネズエラのアレアサ外相は、ボリビアの大統領選挙以来野党勢力、民間メディア、米国大使館、OAS により、反対運動が展開されていると非難声明を発表。マドゥーロ大統領、キューバのディアス＝カネル大統領は、クーデターを強く非難しました。マドゥーロ大統領は、国際社会に、クーデター反対、ボリビアの民主主義擁護を訴えました。アルゼンチンのフェルナンデス次期大統領は、「ボリビアのクーデターにより、米国はラテンアメリカを（軍事政権が跋扈した）70 年代に戻した」と述べました（19.11.12 Cubadebate）。ニカラグア政府は、クーデターを非難する声明を発表するとともに、「アネェスの行為は、憲法違反のファッショ的行為である。ニカラグアは、同じように 2018 年 4 月にクーデター未遂を経験した」と厳しく非難しました（19.11.11 Granma）。メキシコのオブラドール大統領は、クーデターを非難し、OAS はクーデターに黙っていてはいけないと記者会見で非難しました。国際機関としては、南米南部共同市場　（MERCOSUR）、米州諸国民ボリーバル同盟（ALBA）も、ボリビアのクーデターを非難しました（20.01.15 Hispan TV）。

▶外国専門機関の選挙結果の分析

11 日、米国の政治・経済調査所（CEPR）は、「選挙の集計に異常さは見られない、OAS は不正常があったという証拠を全く提示していない、この OAS の発表はメディアを通じての世論形成に大きく影響した。選挙監視は、政治的利害と関係なく行われなければならない」と発表し、OAS の無責任な選挙結果報告を厳しく非難しました。また、数カ国の 100 名余の経済・統計の専門家（ハーバード大学、マサチューセッツ工科大学、シカゴ大学、コーネル大学、ケンブリッジ大学、ノートルダム大学、トロント大学、経済政策研究所、メキシコ国立自治大学）が、OAS の最終報告について、「不正を証明する証拠が含まれていない。偽の批判であり、この批判が、主要なメディアで報道された。モラーレスの優位に変わったことは、急激でもなく、説明が難しいものでもない。恒常的な増加の一部であり、予備集計の評価の前の時間から始まっていた。これに地理的「傾向」もある。開票が遅く報告された地域は、モラーレスの地盤であった」と詳細に批判しています（19.12.05 El Territorio）。

実際、テレスールは「予備集計は民間企業が民間登録サービス（SECRECI）と共に行うものだが、不完全である。これは、軍部の最高司令官と警察指導部がモラーレスに辞任を迫り、モラーレスが辞任したのであり、疑いもなく軍事クーデターである。OAS は、トランプやマルコ・ルビオがボリビアで不正選挙があったと表明したことには沈黙しており、基金の 60%を負担している米国から独立しているとは言い難いと問題の本質を指摘しています（19.11.11 Telesur）。

反対派に付いた一部の軍幹部

同日、カリマン軍最高司令官は、軍部およびアネェス上院副議長の要請により、モラーレス支持勢力を武力で取り締まると発表しました（19.11.11 Telesur）。フアン・ランチパ検事総長は、「選挙に不正常が存在するとの OAS の報告に従って、検察は、不正選挙の容疑で、県選挙管理委員会（TSE）の幹部 33 名を逮捕した」発表しました（19.11.11 ABI）。犯罪防止特別部隊（FELCC）、サヒタリオ社を選挙用印刷物に関わった不正選挙関与の疑いで捜査しました（19.11.11 ABI）。同日夜、19.11.11 夜ハビエル・サバレタ国防相は、「発砲の指令をだしたことはない。人民に銃は向けられない」として、メサ、カマチョを批判する辞任届をモラーレス大統領宛て提出しました。19.11.12 TS

MAS は、10 日の夜以降、警察地方移動捜査部隊、ボリビア警察によるモラーレス、アルバロ暗殺計画があったと確認しました。メキシコのエブラルド外相は、モラーレス前大統領から電話を受け、メキシコ外務省は、内閣府と協議の結果、人道的理由から亡命を受け入れたと発表しました（19.11.11 Granma）。また、メキシコ政府は、メキシコ大使館に保護されていたボリビア政府の閣僚・国会議員 20 名も受け入れると発表しました（19.11.11 La Jornada）。

▶モラーレス、メキシコに亡命

11 日月曜夜、メキシコ軍機が、リマ経由でボリビアに向かいましたが、ボリビア側が着陸をしぶりましたので、数時間待機の後、メキシコ大使、メキシコのエブラルド外相が関与し、ボリビア空軍司令官が着陸を許可。午後 7 時 30 分、ペルー外務省、政治的理由でリマでの給油は認められないと通告。

←ボリビアから出発するモラーレス

エブラルド外相、パラグアイ外相と話し、給油を許可するよう要請。同時にフェルナンデス次期大統領もベニテス、パラグアイ大統領と交渉。リバス・ペルー外相は給油を受諾しました。しかし、出発の手続が遅れ、メキシコ大使は、再び離陸許可を交渉しましたが、ボリビア空軍は、なかなか許可せ

ず。最終的に許可を得て、午後 23 時前、モラーレス前大統領、アルバロ前副大統領、ガブリエラ・モンターニョ前保健相、エボの娘エバリス・モラレスと共に、メキシコの軍用機にコチャバンバ県のチモレ空港で搭乗、パラグアイ向け出発。アスンシオンで、ペルーに領空の通過の許可を依頼し、許可される。また、エクアドルにも緊急の給油が必要な場合、給油を許可するように依頼、許可される。しかし、空軍機が、パラグアイからの帰路、ボリビア軍は、ボリビア領空の通過を許可しないと通告。午前 2 時アスンシオンからペルーに向かう。午前 5 時メキシコ向けペルーを出発。ラパスのブラジル大使は、ブラジル駐在のメキシコ大使と協力して、ボリビア・ブラジル国境上空を飛行することを許可。エクアドルの上空にかかるとエクアドルから領空を航行する許可を出せないと通告あり、海上に迂回する。しかし、午前 8 時、再度エクアドルの外相から許可すると連絡がありました（19.11.12 La Jornada）。12 日午後 12 時 30 分、モラーレス前大統領は、メキシコ到着。ボリビア、ペルー、ブラジルの右派政権の思惑から、大変なオデュッセイアの果てのメキシコ着でした。その後 12 月 12 日モラーレス前大統領は、ボリビア国内の MAS の同志と連絡が取りやすい隣国のアルゼンチンにキューバ経由で移動しました。

モラーレス前大統領は、メキシコ到着後、クーデターを振り返って、このように回想しています。

「クーデターは、ラパスの米国大使館が準備したもの。ウソで固められた罠に陥った。選挙 2 カ月前、米国大使館の商務担当官と会った。彼は、ボリビアの内政には干渉しないと約束した。クーデターは、暴力勢力により行われ、良く組織され、計画され、資金を十分供給されていた。彼らは、暴力行動に参加するのに 300 ボリーバル支払っている。建築関係は 100～200 ボリーバルである。大学では、成績でもって脅した。米国は、麻薬取締部隊（DEA）を使わなかった。ボリビア峡谷平和部隊を組織して使った。反選挙グループ、野党、軍、警察の一部が買収されクーデターの基盤となった。クーデターの名前は、姓がリチウム、名がアメリカである。大統領選挙の前に、イバンカ・トランプがアルゼンチン北部のリチウム三角地帯を訪問した。この地域は、世界のリチウム埋蔵量の 75%を占める。そのほとんどはボリビア領。われわれは、リチウム生産を開始した。しかし、民営化する企みがある。大企業が陰謀で、独占を図ろうとしている。彼らには、モラーレスが政権に残るのは危険だったのである。これまでとは違ったクーデターで、軍部全体が参加したのではなく、一部の司令官たちが参加したのであった（19.11.16 Granma, 19.11.16 LJ）」。

12 日、MAS の議員は、「カマチョが公然と言ったように国会の周りが封鎖されているが、国会の開催には確固とした安全が必要、ボリビア国民の利益のために憲法にそって解決することが必要」と訴えました（19.11.12 ABI）。しかし国会は、アネェスにより最終的に強引に

開催されましたが、MAS 議員は欠席しましたので、定数不足となり、議会は成立していませんでした（19.11.12 Granma）。

▶無法なアネェス上院副議長の暫定大統領就任

しかし、アネェス上院副議長は、午後 3 時半に国会を強行して召集し、対策を協議しようとして、聖書を持って議場に入りました。アネェス議員は、議会でモラーレス大統領、ガルシア副大統領の辞任について、辞任届の読み上げもせず、討議にも付しませんでした。午後 6 時過ぎ、ほとんど空席の上院議会で、アネェス上院議員は、民主統一党（UD）の一部の議員の前で暫定大統領を宣言しました（19.11.12 La Razón,19.11.12 CD）。これは明らかに憲法違反で、議会の内規も踏みにじったもので、警察と軍の力によるクーデターであることを示すものでした（19.11.12 Prensa Latina, 19.11.12 La Razón）。憲法第 170 条によれば、大統領の辞意は国会に提出されなければならないことになっていますが、モラーレス、ガルシアとも議会に辞表を届けてはいませんでした。アネェスは、「聖書が大統領宮殿にもどるように」と述べて、大きな聖書を持って議場に入りました。数日前、カマチョもまた、聖書をもって議場に入り、「神は政府に戻るであろう」と述べています。憲法第 4 条では、宗教および信教は自由であり、国は宗教から独立していると謳われています。また憲法第 14 条では宗教による差別を禁止しています。さらに第 30 条では原住民の信教の自由が特別に規定されています。アネェス、カマチョともカトリックですが、議場に聖書を持ちこむのは、MAS 政権の時代、原住民の文化、宗教感が政治に現れていたという考えから、それに反対する行為として取られたものです。上記の憲法の精神から逸脱するものとして批判されています。両者ともカトリックの保守派の支持と福音派のリーダーの支持を受けていることも特徴で、その人種差別主義が価値観を共有しているところです（19.11.27 BBC）。

議場にキリスト像を掲げるアネェス

この日、エルアルトの多くの市民が抗議でラパスに行進し、ラパスでは、多くの市民がクーデターと原住民インディオへの差別に抗議しました。集会では、国会は混乱を招くだけゆえ、開催しないように要求。また、集会は、カマチョが国会内にあったウイパラを焼却したことに抗議しました。しかし、ボリビア空軍は、この集会に低空飛行で威嚇しました（19.11.12 Granma）。

▶アネェスの暫定大統領宣言を巡り、OAS で激論

１２日、アネェス上院議長が、大統領の自己宣告をおこなおうとしていた、同日の午後４時頃、 OAS は、ブラジル、カナダ、コロンビア、米国、グアテマラ、ペルー、ドミニカ、ベネズエラの要請で、常設委員会会議を開催しました。会議では、メキシコ代表が、ボリビア

のクーデターによる憲法破壊を憂慮していると表明。ウルグアイは、ボリビアにおいてモラーレスが辞任を強制されたこと、法治国家が破壊されたこと、それについてアルマグロ事務総長が沈黙していることを批判しました。コスタリカは、このクーデターは、外部及び内部の要因によって推進されたもので、第一の目的は、経済、生活面で成功している政治モデルを破壊する目的で、その他の国々でも試された筋書きに従って国と行政の正当性を奪うことであると批判しました。ニカラグア代表は、OAS は、ボリビアの憲法秩序の破壊について、OAS 憲章に従った客観的、合理的、一貫した声明を出さねばならない、干渉主義を批判しなければならない、国外勢力は、暴力的ファシズムと寡頭制支配を熱望したと主張しました。メキシコ、米国は、OAS の場で、ボリビア問題で激論を交わしました。アルマグロ事務総長は、エボ・モラーレスこそ、10 月 20 日の選挙を奪ってクーデターを引き起こしたのであり、OAS が引き起こしたものではないと OAS の選挙結果の声明を自己弁護しました。ウルグアイ、ニカラグア、カリブ海諸国はメキシコの立場を支持しました。最終的に、OAS の 33 カ国が、米州憲章に準じて、憲法の遵守、法治国家の遵守を訴える声明を出しました（19.11.12 ABI, 19.11.13 La Jornada）。

11 月 13 日、クーデター派は、国営通信社 ABI、政府系新聞社 Cambio に介入し、 この日から親クーデター派の報道となりました。

←アネェス反対を叫ぶ市民

MAS のサルバティエラ上院議長が、現れて、辞任届を提出しておらず、辞任していないと述べましたが、事態は、すでにクーデター派により、モラーレス政権のアクターの一掃が着々とすすめられており、時すでに遅しの感がありました（19.11.14 La Jornada）。

▶今後の選挙をめぐり、国会新議長を選出

14 日には、上院議会で、MAS+野党 74 名が出席し、MAS のモニカ・エバ・コパ上院議員（MAS）が上院議長に、ペドロ・モンテス（MAS）が副議長に選出され、コパ上院議長は、暴力を終えるように要請しました。下院議会でも、MAS、UD、PDC が出席し、シモン・セルヒオ・チョケ（MAS）が新下院議長に、ヘンリ・カブレラ（MAS）が副議長に選出されました。MAS は、新たな選挙を行う条件をクーデター派に勝手に作らないようにするために議会に出席したのでした（20.01.08 La Razón）。

アネェス暫定大統領は、「モラーレスの出国は、クーデターとはいえない。憲法の正当性の復活である。モラーレスは、全体主義の国にかえてしまったので、これから体制の返還を図る。ボリビアで民主主義を再建する時が来たのだと述べました（19.11.13 ABI）。

←引き続き起きるアネェス抗議行動

アネェス暫定大統領は、カルロス・オレヤーナを軍最高司令官に、パブロ・アルトゥーロ・ゲーラ・カマチョを軍参謀総長に任命しました。政令第 4077 号で 11 名の暫定政府の新閣僚を任命しました。それらは、ヘルヘス・フスティニアーノ大統領府長官、ロクサーナ・リサラガ通信相、フェルナンド・ロペス・フリオ国防相、ホセ・ルイス・パラーダ経済相、アルトゥーロ・ムリージョ官房長官、アルバロ・コインブラ・コルネホ法相でした（19.11.13 Cambio）。また、カリマン司令官に代わって、セルヒオ・カルロス・オレジャーナ軍最高司令官に任命しました。

反アネェス抗議を弾圧する警官

街頭では、数千人がエルアルトでモラーレス支持のデモを行い、ラパスに到着しました。クーデターへの抗議が沈静化することなく続いており、アネェス暫定大統領は、MAS が引き続き街頭で暴力を行使していることは遺憾であると述べつつ、アネェス政府は移行政府だから、任務は、更新された TSE で新たな透明な選挙を行うだけであるとのべました（19.11.14 ABI）。アネェス暫定大統領は、「無期限の再選可能の憲法判決を廃棄する予定である。憲法裁判所と相談し、軍と警察の支持を受けて大統領を宣言した」と述べ、軍と警察の関与があったことを認めました（19.11.14 Prensa Latina）。また、アネェス暫定大統領は、「モラーレスとアルバロは、次の選挙には立候補できない、他の立候補者を探すとよい。MAS は立候補をだせるはず」と、モラーレスの影響の一掃に懸命でした。19.11.14 RT

アネェス暫定大統領は、就任後、外交政策を見ても、キューバ医療団の追放、ベネズエラ、キューバとの外交の断絶、米国駐在の大使の任命、イスラエルとの国交を回復、IFM への加盟の検討。CELAC（中南米カリブ海諸国共同体）からの脱退の検討、3 月 OAS 選挙でのアルマグロの支持の表明など、親米右翼路線が際立っています。国内政策でも MAS の左派政策の一掃、汚職容疑を捏造し、MAS の活動者狩りを進めています。一般には暫定大統領としての選挙までの 90 日の任期内では、重要な政策変更はしないのが普通ですが、ついには、5 月の大統領選挙への立候補を表明するに至り、暫定大統領自己宣告の目的が、こうした政策の実現にあったことを事実で明らかにしています。

12 月初めまでにクーデター騒動による被害者は、死者 30 名以上、負傷者約 800 人、逮捕者 1,500 人以上でした（19.12.06 Granma）。

大統領宮殿で大きな聖書を示すアネェス暫定大統領

PART Ⅱに続く

（2020 年 2 月 8 日　新藤通弘）